まちの情景と建築　世界編

田中 修一

［街　　路］威風堂々　イングランド・ロンドン　ナショナルギャラリーとザ・マル

ネルソン提督の像があるトラファルガー広場にナショナルギャラリーがある。1824 年に銀行家アンガースタインの所蔵品とそのタウンハウスを民間人が買い取ってスタート。その後 1834 年に現在の広場前に移転した。王室・貴族の所蔵品ではないところがユニークな出発点である。ご覧のように入口は引きも切らず入場者であふれている。それもそのはずで入場料はなんと無料。外人にも同じ扱いなのが太っ腹なところだ。ワシントンにもナショナルギャラリーがあり、ことらも無料になっている。広場の四隅にはおなじみのライオンがいる。子供たちがよじ登って遊んでいても、誰も咎めない。これも大らかなところだ。このライオンが気に入った三越のオーナーが、寸法 1/4 のミニチュアを作らせてデパートの入り口に置いている。しかしその大きさと迫力はオリジナルとはだいぶ違うなあと感じるだろう。

この広場からバッキンガム宮殿に向かう直線道路を「ザ・マル」と呼ぶ。ご覧のように街路に立ち並ぶユニオンジャックの旗の迫力はどうだろう。日本の皇居で言えば御幸通りに相当する通りなのだが、日本ではこんな風景はまず出来そうもない。ロンドンでは大英帝国の誇りを国民みんなが持っているからできるのだろう。ちなみにエリザベス女王はグレートブリテンを含めてカナダ、オーストラリア、ニュージランド、ジャマイカなど、なんと 16 カ国の女王として君臨していることをご存じだろうか。正面がバッキンガム宮殿。道路は車道・騎馬の道・人の道と 3 種類に分かれている。騎馬警官が巡回するのが騎馬の道で、馬用の信号まであるのが面白い。

ところで、我々が言うイギリスという国は実はない。ユナイテッドキングダム（連合王国）である。イングランドが周辺を制圧してこの国ができた。国旗がそれを現している。イングランドは赤＋印（st ジョージクロス）、スコットランドが白×印（st アンドリュースサルタイアー）、北アイルランドが赤×印（st パトリックサルタイアー）で構成されている（注：サルタイアー saltire：斜め十字のこと）。ウェールズは最初に降参したので国旗に印がない。しかしそれでは気の毒だと、皇太子の称号をプリンス・オブ・ウェールズと呼ぶことにした。